

## 須賀遺跡（第9次）発掘調査の成果 ～<sup>にさい</sup>二彩陶器<sup>こつぼ</sup>の小壺が出土しました。～

- 1 調査原因：個人住宅建築
- 2 調査期間：平成30年7月15日～平成30年9月6日
- 3 調査場所：鈴鹿市須賀一丁目1693番7
- 4 調査面積：88.41 m<sup>2</sup>

今回の第9次調査では大きく2つの成果がありました。一つは弥生時代中期の環濠SD0901の確認です。環濠とは集落の周りに巡らせた堀です。延長11mあまりを検出しました。幅3.3～3.5m、深さは検出面から1.3～1.5mを測り、人がすっぽり隠れてしまう規模です。掘られたのは弥生時代中期前葉以前に遡るとみられますが、その頃の遺物は極少量です。中層からは弥生時代後期の土器がまとまって出土しており、その頃まで掘り直され機能していたようです。第2・5次調査で確認された環濠を繋ぐ形この調査区を通ることが想定されていましたが、予想通り調査することが出来て、一連の環濠であることが確実になりました。

もう一つは、平安時代の掘立柱建物群です。SB0904は南北棟の建物とみられます。主軸は真北から1.6°程度西に振れていますが、正方位を意識していると思われます。柱穴の切り合い関係から重複する3棟のうち最も古い建物となります。柱穴は径が0.3～0.4mの不整な隅丸方形ですが、他の建物より深く掘られています。柱間は東西（梁行）が約2.25m（7.5尺）、南北（桁行）が2.4m（8尺）とみられます。SB0905は南北棟の建物とみられ、建物の主軸は同様に真北から1.6°程度西に振れます。SB0904より新しく、SB0906よりは古い建物とみられます。柱間は東西（梁行）が約2.25m（7.5尺）、南北（桁行）が2.7m（9尺）とみられます。SP06の柱穴掘方埋土から二彩陶器小壺が出土しました。SB0906は東西棟の建物である可能性があります。また、主軸も他の3棟と異なり真北から6°近く西に振れます。SB0904・SB0905より新しい建物とみられます。

柱間は東西（桁行）が約2.25m（7.5尺）、南北（梁行）が2.4m（8尺）とみられます。SB0907は真北から1.6°程度西に振れる建物です。柱に切り合い関係が無いとため新旧関係は不明です。柱間は南北が2.25m（7.5尺）、東西は2.4m（8尺以上）あるとみられます。

第6・8次調査でも正方位を意識した建物が数棟確認されていましたが、今回検出された建物は柱の掘方が方形で大きいうえ、建物が同一箇所です。3回以上建替えられていることから、一帯の建物群の中で中心的な役割を持つと考えられます。

SB0905の柱穴の埋土から二彩陶器の小壺が出土しました。半分ほどを欠き、残存高3.9cm、底径3.8cmを測ります。二彩陶器は奈良時代後期から平安時代前期にかけて流通する、緑色と白色（透明）の釉薬をかけ分けた高級な焼き物です。出土するのは主に都で、地方では寺院・官衙・祭祀遺跡などに限られます。三重県での出土例は極めて少なく、斎宮跡（明和町：官衙）・伊賀国府跡（伊賀市：官衙）・神島遺跡（鳥羽市：祭祀）・打田遺跡（松阪市：寺院関連）です。

しかし、この須賀遺跡では平成6年に阿自賀神社の境内地で実施した調査で、すでに1点出土していて今回が2例目となります。このことは、この遺跡に都との特別な関係を持つ有力者が居住していたか、重要な施設があったことを示します。

須賀については、『伊勢大神宮神領注文』という文書に、親王御領（皇室の所有地）であった「須加崎」が白河院（上皇）の時に外宮に寄進され、保安3（1122年）に御厨（<sup>みくりや</sup>神宮の荘園）が建立

されたという記録があります。「須加崎」は現在の須賀町一帯とみられますので、皇室にかかわる領地が所在した可能性があります。一帯で確認されている正方位を保った平安時代の建物群は、御領

の運営にかかわる施設の一部であった可能性もあり、それゆえ貴重な陶器が持ち込まれたといえるのかもしれませんが。今後の周辺での調査の成果が期待されます。



須賀遺跡出土の二彩陶器小壺（左は阿自賀神社境内出土品〔一部復原〕）



平安時代掘立柱建物群（南から）



二彩陶器小壺出土状況（南から）



弥生時代環濠（南から）



調査区全景（合成写真：南から）

